説教要旨『マリアの賛歌』

ルカによる福音書　１章８～２０節

聖書は、私達が２つの世界に生きていることを教えてくれています。１つは人間が人間を支配している世界。もう一つは、神が支配している世界です。確かに世を見渡せば、ここもかしこも、人間が人間を支配しているかのようです。しかし同時に、神の支配が及ばない場所もないことを、イエスは教えられました。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ福 16：33）。

その主イエスは、マリアから生まれました。マリアは、自分のことを「身分の低い」者だと受けとめています。彼女にそう感じさせていたのは、人が人を支配する世界です。社会の仕組みに合わせて身分の差が生じ、命の価値が値踏みされていく、そんな力学が働く世界です。しかし神は、そのような世の支配の枠組みを超えて、マリアを救い主の母として選び、「身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たす」世界があることを示します。マリアは、人が人を支配する世界を通して見えてくる「身分の低い私」から、神が支配する世界を通して見えてくる「幸いな私」の姿に気づかされていくのでした。

「生きている生かされている／歯が痛き／手足がかゆき／咳が苦しき」。この詩を作った水野源三さんは、病のために体が弱り、手足の自由が奪われていくなかで、次のような思いを示しておられます。「歯の痛さ、手足のかゆさ、咳の苦しさは、いずれをとっても耐え難い現実である。それは、上昇志向の価値基準から見れば、大きなマイナスでしかない。しかし、その中に、神の恵みを見ることができた。その苦痛こそが生きていることの証しであり、自分を生かしたもう神の御業のしるしである。価値の逆転があるということを発見した」。

マリアは「わたしの魂は主をあがめ」と歌っていますが、「あがめる」という言葉には「（神の存在を）大きくする」という意味があります。人が人を支配する世界…そこは、「思い上が」り、「権力ある者」となり、「富める者」となって自分を大きくしなければ、自分への価値を見出しにくい世界です。ですが、それらのものは「代々に限りなく」という訳にはいきません。いつか、やがて、あるいは突然に、その「思い上がりは打ち散らされ」、「権力の座から引き降ろされ」、「富める者が空腹のまま追い返され」、小さくされていくことがあります。でも、そのようにして私達が限りある存在として小さくされていく現実は、かえって、「代々に限りな」い神の存在や憐れみの大きさを私達に明らかにしてくれるのだと、マリアの讃歌は教えてくれているように感じます。

（文責：望月達朗牧師）